バカとテストと復讐者

GHOST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと復讐者

【Ｎコード】
Ｎ１３１５Ｚ

【作者名】
ＧＨＯＳＴ

【あらすじ】
――アンタが俺に教えてくれたんだぜ？『己を酷い目に遭わせた者にはそれ以上の痛みと苦しみを与えよ』ってな。だから俺は『アンタを殺した』んだ。――だから、俺に罪はない。※これはバカとテストと召喚獣の二次小説です。残虐な物語にはしないつもりです。――多分。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０（前書き）

粗筋と殆ど同じ言葉しか話してませんが、一応プロローグなので多めに見て下さい……。

Episode0

「……哀れな姿になったな」

俺は醜い姿となって死んだ母親の姿を見ながらそう言う。

「――忘れちゃいねえよな。お前が俺にしてきた事を」

母親からは当然のように返事はない。聞こえている訳がないと思いながらも口を動かす。

「アンタが俺に教えてくれたんだぜ？」

母親の額に俺は右手を添える。

「――『己を酷い目に遭わせた者にはそれ以上の苦しみと痛みを与えよ』……だったか？」

俺は邪悪な笑みを浮かべた後にこう言った。

「だから俺は『アンタを殺した』んだ。怨むなよ？俺はアンタに言われた事を実行したに過ぎないんだからさ」

俺は母親から視線を外し、病室を出た。出る直前に放った言葉と共に。

「――俺に罪はねぇ」

そしてこれが、正真正銘の『俺』が生まれた瞬間だった。『復讐者（ジャー）』としての俺が――――

Ｅｐｉｓｏｄｅ０（後書き）

今日から書き始めましたが、とにかく短い！！しかもシリアス的な話になってしまいました……（笑）

オリキャラ設定（前書き）

オリキャラの設定ですが、どうでも良い事まで書いてありますね～。

オリキャラ設定

八雲（やぐも）　海星（かいせい）

クラス：二年Ｆ組生徒
異名：復讐者（アヴェンジャー）

この作品の主人公。黒い髪に黒い瞳というごく普通の見た目をしている。死んだ魚のような目をしているのが特徴的。
幼い頃に母親を殺し、現在は妹と二人暮らしをしている。母親を殺した頃から誰も信用しない人間となってしまった。裏社会にも関わっており、主にヤクザやその他の裏組織等から送られた依頼を報酬次第で請け負う『裏社会の何でも屋』である。
その為、財産は二億以上持っており、家も二人暮らしにしては広い場所で暮らしている。
普段は落ち着いている性格だが、人に恨みを持った時には残虐な性格へ変わり、周りからはそれを『復讐状態』と呼ばれている。一度恨んだ相手には必ず仕返しをする事をモットーとしており、誰も逆らう者がいない。
妹と自分の写真が入っているペンダントを大切に持っており、それを壊されたり触れられたりすると本気でその人物を殺そうとしてしまう。
頭はそれなりに良く、現代国語、英語、現代社会、数学、科学、物理等の世の中に役に立つ科目のみ４００点以上の高得点をとるが、その他の科目は１００点前後しかとれない。復讐状態の時は学力が上がり、現代国語、英語、現代社会、数学、科学、物理等は７００点以上とる事ができる上にその他の科目も６００点以上とる程の実力を発揮する。
召喚獣は白いＴシャツに黒い上着という装備をしており、両手には妖気を帯びたような双剣を装備している。

八雲（やぐも）　雪（ゆき）

中学一年生であり、海星の妹。寂しがりであり、兄が裏の仕事をしている事を知らない為に、よく家から出ていく兄が自分の元から居なくなってしまうんじゃないか？とずっと恐れている。母親には酷い目に遭わされていて、兄が母親を殺す際に手助けをした。
勉強はあまりできない為に毎日毎日海星に教えて貰っているのだが、海星の説明が難しい為に理解するのに時間がかかってしまう。大人しい性格をしていて、あまり友達がいない。

オリキャラ設定（後書き）

次回からまともな話になります。イキナリ設定が崩壊してしまったらどうしよう……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１（前書き）

趣味で書いているような小説なので駄文です。温かい目で見て下さると嬉しいです。

Episode1

バカテスト　化学

問　以下の問いに答えなさい。
『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え
『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント
正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っ掛かりませんでしたね。

八雲海星の答え
『問題点……（白紙）
合金の例……（白紙）』

教師のコメント
テスト中に寝ないで下さい。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント
そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え
『合金の例……未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント
すごく強いと言われても。

――――――――――――

「……お兄ちゃん」

「どうした？雪？」

妹の八雲雪（やくもゆき）は、泣きそうな目でこちらを見ている。

「……私達、これからどうすればいいのかな？」

「二人で生きてくしかないだろ。大丈夫だ。何があっても俺が守ってやるから」

俺は雪の頭を優しく撫でた。

「……お兄ちゃんは何処にも行かないよね？ずっと一緒にいてくれるよね」

不安そうに涙ぐむ雪。だが俺だって不安だ。父親は行方不明、母親は死んだ。この状態でこれからどうすればいいのか。
だが俺が不安を表に出せば雪まで不安な気持ちになってしまう。
俺はできる限りの笑みを作った。

『当たり前だ』

……

……

……

「ん……あ？」

俺は目を覚ました。どうやら今のは夢だったようだ。

「……懐かしい夢を見ちまったな」

軽い欠伸をして目を擦ってから俺はベッドから出る。そして制服に着替えてリビングに向かう。

「……雪はまだ寝てんのか？」

リビングに雪がいないのを確認すると、俺は雪の部屋の前に立ち、軽くノックする。

「朝だぞ～。起きろ～」

部屋の中でガタン！という音がした。一体何があったんだ？
暫くして部屋から出てきた雪は頭にでかいたんこぶが出来ていた。

「……まさかお前、さっきの音って……」

「……起こされた途端にベッドから落ちた」

「……」

俺は少し呆れながら食パンを食べる。その後歯を磨き軽くみだしなみを整えた後、俺は鞄を持って外へ出る。

「じゃ、行ってくるな」

「……行ってらっしゃい」

俺は文月学園に通っている。今日は新学期なので俺は今日から二年となる。ちなみに雪は今年から中一なので、明日の入学式の日から登校だ。だから今日は雪は留守番する事になっているのだが……

「なんか心配だな」

雪は以外とドジであり、放っておくと電子レンジを壊したりとか有り得ない事をする。だから心配なのだ。

「……はぁ」

だが心配事はもう一つある。前話のオリキャラ設定を見たなら知っているとは思うが、俺は裏社会でも活動している。

振り分け試験の日に裏の仕事(いらい)が入ってしまった為に俺は振り分け試験を受けていないのだ。つまり俺は強制的に最低クラスのFクラスとなってしまった訳である。

「はぁ……憂鬱……」

「何がだ」

突然、ドスのきいた声が俺の正面から聞こえた。恐る恐るそちらを向く。

「やっぱり鉄人(にしむら)先生だったか……」

「今、鉄人と書いて西村と読まなかったか？」

「気のせいですよ」

俺は落ち着いた様子で否定した。この人は文月学園の生活指導の担当をしている教師、西村先生だ。

ついでに西村先生は生徒達の間では鉄人と呼ばれて恐れられている。目をつけられると厄介な教師である。鉄人の名前の由来は西村先生の趣味であるトライアスロンらしいがな。

「とりあえずおはようございます。ついでに振り分け試験をサボ……休んだ理由は聞かないで欲しい」

「今明らかに『サボった』と言おうとしたな？全く、お前という奴は……。まあいい。ほら」

西村(てつじん)先生は俺に茶色の封筒を渡す。その封筒には大きく『八雲海星』と書かれていた。

八雲海星ってのは分かるとは思うが俺の名前な。

「どうせクラス分けの手紙だろ？Ｆクラスという事は目に見えてるし」

「まぁ、決まりだからな」

「……こんな面倒な事をせずに掲示板とかで張り出しちまえば終わりだろうが。何考えてんだあのクソババァ……」

俺は分かっていながらも封筒の中身を見た。やはりそこにはこう書かれていた。

『八雲海星……Ｆクラス』

改めて見るとショックだな。裏の仕事があるから仕方がないのだが。
因みに俺はその日、十人人を殺し、百七万稼いだ。
裏の仕事は意外に儲かるからな。実は財産二億以上ある。

「ついでに学園長からの伝言を預かってきた」

「あ？あのクソババアの？」

「『真面目にやってくれ』だそうだ」

「だが断ると伝えておいてくれると有り難い」

俺はそれだけ言うとＦクラスの教室へと向かっていった。

……

……

……

３階へ行くと、学校の設備とは思えない巨大なホテルのロビーのような教室、Ａクラスの教室が目に入った。

「……これって結構金かかってるよな？俺もその気になればこれ位の家は買えるが……」

俺は教室の中を見てみる。すると、そこにはノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、ドリンクバーやらと言った高級設備があった。

俺は流石に居辛くなってきて、その教室を離れた。

右手から鞄が離れたのを感じた。そして鞄は音をたててこの旧校舎の床へ落ちた。

「……あ、あのクソババア。どんだけバカには厳しいんだコラァ」

俺が驚愕したのはＦクラスの設備である。Ａクラスとは対象的に、埃だらけの部屋にかび臭い臭い。しかも窓ガラスからの隙間風が凄く寒い。

そんな史上最低の設備だった。格差社会の厳しさを改めて思い知った。だが、これは流石に訴えられるレベルにまで達しているよな……？

そして此処からが、俺の最低クラスでの最低で最悪で最凶な学園生活の始まりだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１（後書き）

ひぃ～。今日は偶然暇だったから書けましたが、明日からは更新が遅くなっていくと思うのでご了承下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1315z/

バカとテストと復讐者

2011年12月5日00時51分発行